

7 新発見の馬玄台『難経正義』

○王¹⁾ 鉄策・真柳 誠・小曾戸 洋

明代の馬玄台は『素問註証発微』『靈枢註証発微』の著作で知られ、それらを介し日中医学交流史に多大な足跡を遺した。他の著作では近年、仏国・独国・英国で『脈訣正義』が発見された。また筆者らも『難経正義』が中国に残存することを新たに見出した。

当発見は馬玄台の学術研究に大きな意義を持つ。よって『難経正義』と馬玄台の著述について検討した結果を以下に報告したい。

一 所蔵機関

当本は中国科学院図書館・文献情報センター善本室の所蔵。その前身は北京近代科学図書館で、同館は一九二五年成立の東方文化事業総委員会の発案で一九三六年二月に正式開館、日本外務省の対支文化事業特別会計法

案で義和団の賠償金が利用された。同館は一九四五年八月の日本敗戦と同時に中国政府に接収され、現在の中国科学院図書館に引き継がれた。当『難経正義』には「東方文化事業総委員会収蔵図書印」が押されるので、一九二五〜一九三六年の購入と判断できる。

二 成立と刊行の年代

馬玄台に詳伝はなく、当本に自序や刊記等もない。ただし当本の鄭復亨序は雲間（江蘇省松江県）で初刊するといひ、馮行可は刊行を前提とした序を万曆七年（一五七九）に記し、同七年の屠隆序と同八年の陳懿德序もある。一方、当本は嘉靖後期〜万曆初期の字体で、万曆版の版式を持つ。以上から『難経正義』は万曆七年以前に成立し、当本は同八年（一五八〇）序刊の初版本と判断できる。

本書各巻首には「明会稽庠生玄台馬時註証」と記すが、『素問註証発微』（万曆一四年刊）・『靈枢註証発微』（同一六年刊）・『脈訣正義』（同一六年後刊）は「明太医院正文会稽庠生玄台子馬時仲化註証」と記す。すると馬氏は『難経正義』初刊の万曆八年にまだ太医院の医官ではなかったと推定される。なお本書の凡例によると、馬氏は『素

問・靈枢註証發微』の後に本書を完成したというので、成立と刊行の順次は逆転したらしい。

三 流布経緯

本書に万暦八年以後の再版本は見あたらない。一方、明代の『医蔵書目』と明末清初の『千頃堂書目』は本書の所蔵を記録するが、多紀元胤の『医籍考』は未見と記す。『医蔵書目』の蔵書者は浙江省の官僚、『千頃堂書目』の蔵書者は江蘇省南京の人である。すると本書は江蘇で一回出版されただけらしく、それで江蘇・浙江省のみに流布したのだろう。その一本を北京近代科学図書館が購入し、いま中国科学院蔵書に伝世したのである。

四 構成と内容特徴

本書は目録より全九巻と分かるが、現存本は前半の五巻四冊のみ。全体は序文・凡例・目録・本文からなり、目録によると書末に八九種の図があった。本文は每半葉一〇行・行二二字で、『難経』原文と馬氏の注・考証および門人の評論から構成される。馬氏の注には大字・小字の別、考証には正考証・附考証があり、さらに小字で校正・評論を記す。

彼の註証（注釈・考証）は主に『内経』に基づき、高レベルな創造的知見に富む。その一方、呂広・丁徳用・紀天錫・李晞范・王宗正・張元素・滑伯仁・熊宗立・張世賢などの歴代の『難経』注釈を厳しく論評する。本書が広く流布しなかつた一因かもしれない。

五 その他の著述

馬氏の書は『難経正義』『素問註証發微』『靈枢註証發微』『脈訣正義』の順で刊行されていた。彼と同時代の隣県にいた劉浴徳の『医林続伝』は、馬玄台伝に当既刊四書を挙げ、さらに未刊書があると記す。これは『医蔵書目』が「内経類旨・傷寒論大全・産科大全・針灸正門・古案原旨・医旨釈疑・医門觀海集・疑証輒効録・本草髓論、以上九種見玄台脈訣正義」と著録する書に該当しよう。この九書名は『脈訣正義』の序文か凡例に彼の自著として記されていたのだろうが、いずれも未刊のためか伝存記録はない。

① 黒龍江中医学院／北里研究所東医研医学研究部

② 茨城大学人文学部

③ 北里研究所東医研医学研究部